

■樺太アイヌの文化伝承者：藤山ハルさん、金谷フサさん、金谷栄二郎さんのあゆみと功績を知るための年表

和暦	西暦	月日	内 容
明治33年	1900	4月20日	(山田) 藤山ハルさん(樺太西海岸恵須取〈エストリ〉)に生まれる。 * 藤山ハルさん：樺太アイヌ文化・言語伝承者 * 11-12歳までエストリ居住、その後家族で6里ほど南のフロオチに移住。 18歳で山田万次郎氏と結婚、翌年夫とライチシカに移住。夫は昭和17年死去、その後昭和19年までライチシカ居住。 * 昭和19年藤山伯太郎氏と結婚、真岡の多蘭泊(たらんとまり)に移り、翌年終戦。昭和23年7月30日、千歳丸で函館に引き揚げ、その翌年夫死亡。 (夫氏名・引き揚げ日：引揚証明書写) * 昭和28年、長女フサさんが住む常呂郡常呂町栄町(現北進町)の柳川助太郎氏借家に入居(ハルさん最初の家) * 当時の地番は字常呂番外地 (服部四郎／編『アイヌ語方言辞典』)と四郎子息：旦／あさけ氏調査)
大正10年	1921	3月3日	金谷フサさん、樺太西海岸ライチシカで藤山ハルさんの長女として生まれる。 * 昭和13年、野田昭治さんと結婚、二男二女の子どもに恵まれる * 昭和22年8月28日、千歳丸で北海道の函館に引き揚げる(引揚証明書写) * 昭和27年、常呂に永住の地を求める(柳川助太郎氏を頼り来町。サロマ湖が故郷のライチシカ湖に似ていることと、オホーツク海がつながっていることで、常呂を第二の故郷と決める) * 昭和40年、金谷栄二郎氏と結婚 (金谷フサさんの葬儀使用略歴から)
昭和30年	1955	8月18日	東京大学服部四郎教授、アイヌ語調査のため初来町、藤山ハルさんとめぐりあう。以後、継続的に調査が始まる。 * 「…服部博士は、以後19年間、年平均に一度は常呂にきて、彼女を訪ね、その言葉を調査した。〈藤山さんは国宝的存在です〉と、常呂の有力者たちにも言い大切にしてもらうよう頼んだ。定宿の常呂館のあるじの上杉武雄さんが町長になったこともあって、藤山さんは道営の住宅に住めるようになった…」 (司馬遼太郎『街道をゆく三十八 オホーツク街道』)
		8/23-9/6	服部四郎氏による藤山ハルさんの本格的な聞き取り調査開始
		9月4日	常呂劇場主人大西信武氏が、常呂館に服部四郎氏を突然来訪

			* 藤山ハルさんの良き理解者で庇護者でもあった大西信武さんとの出会い * 大西信武さんの凄みを感じさせる場面として、村崎恭子『カラフトアイヌ語文法編』の服部四郎氏序文から「…例の老嫗についてアイヌ語を調べているとき…夕食後、宿でくつろいでいると…５０歳くらいの見知らぬ男が何の案内もなくはいって来て、いきなりあぐらをかいた。見ると、ネクタイはなし、ズボンのボタンは全部はずれている。小柄で痩せ形だが、顔は日焼けして額の皺が深く、眼光が鋭く、人差し指が一本ない。…乱暴な口調で〈あんたはアイヌ語を研究しているんなら、アイヌに同情を持ってるだろう〉と切り出してきた。率直に言って、〈何をゆすりに来たのだろう〉というのが、私の最初の反応だった。しかし、３０分ほど話を聞いているうちに、私はその中に真実を感じ取った。そこで、この人のいうことを聞き入れて、極貧のアイヌの人々のために網走まで出て、役所に陳情して歩いたこともある。この人こそ、実は、常呂の大堅穴群の発見者、大西信武氏だったのだ」
		秋	ハルさん常呂町在住後２番目の家を最初の家の東隣に建てる（註：服部旦氏）
昭和３１年	1956	8/11-9/29	服部四郎氏の藤山ハルさん２度目の聞き取り調査（常呂・川湯） * ハルさん同行で興部町沙流、上沢木のカラフトアイヌ語の調査
昭和３２年	1957	8月25日	服部四郎氏の論文「アイヌ語における年長者層特殊語」（『民族学研究』第２１巻３号）* 藤山ハルさんの研究に基づく論文
昭和３５年	1960	3月1日	常呂町ラジオ共同聴取放送所「この人をたずねて（藤山ハル）」放送 （２月２７日録音、藤山ハルさんの「お祝いの歌・ムックリ・トンコリ」演奏） * 後に、録音テープを服部旦氏がＣＤに複製 村崎恭子氏による藤山ハルさんの聞き取り調査が始まる * …私にとって服部先生は人生の道標のような存在であった。１９６０年の春、東大の言語学科に学士入学して間もなく研究テーマについてご相談したとき…「あなたは…樺太アイヌ語をやりなさい」ときっぱりおっしゃった。私は喜んで先生のお勧めに従って、その夏早速先生のご紹介で…藤山ハルさんの住む常呂へ赴いた。こうして私にとっての細くて長い樺太アイヌ語研究の道が始まった…」（村崎恭子「樺太アイヌ語と服部四郎先生」：『服部四郎追悼文集』（１９９６年１月発行）所収） * …服部博士はハルさんに対して、肉親同然につくした。ハルさんが語り疲れてくると、肩をもんであげたという。そのもみ方は玄人はだしで、学生だった村崎

			さんは肩のもみ方まで教わったということが、村崎恭子著『樺太アイヌ語』の〈まえがき〉にある…（司馬遼太郎『街道をゆく 38 オホーツク街道』から）
昭和36年	1961	3月10日	服部四郎氏の論文「アイヌ語カラフト方言の〈人称接辞〉について」（「言語研究」第39号）＊藤山ハルさんの研究に基づく論文
昭和36年	1961	11月25日	樺太アイヌ民族調査（北海道音楽協会主催・常呂町中央公民館） 山本吉太郎の太鼓、藤山ハルの音頭で樺太アイヌの舞踊「イソコ ヘチリ（熊祭りの踊り）」、「ウポポ（祭りの踊り）」などを録音・録画、後日、NHKテレビ、STVテレビ、NHKラジオで放送（「広報ところ」） ＊後に、録音テープを服部旦氏がCDに複製
昭和37年	1962	7月17日	NHK「アイヌ伝統音楽1」（常呂町中央公民館）で、藤山ハルさんのトンコリ演奏収録（「北海道東部に残る樺太アイヌ文化1」） ＊萩中美枝氏、スタッフとして来町
昭和38年	1963	9月19日	「ところイソヤンケまつり」開催（常呂町中央公民館） ＊常呂町開基80周年記念事業の一環として実施 ＊樺太アイヌの歌や踊りを常呂町民対象に披露した最初 ＊イソヤンケとは、海の幸を陸に持ってくる神さまの意 ＊「ところイソヤンケまつり」解説には、当日演奏・踊ったと思われる曲を藤山ハルさんの言い伝えとして紹介している。（「ところイソヤンケまつり」解説）
昭和39年	1964	8月20日	服部四郎代表編集者『アイヌ語方言辞典』第1刷（岩波書店）発行 ＊樺太方言は、すべて藤山ハルさんの言葉
		8月	藤山ハル・（金谷）野田フサ・太田イク旭川アイヌ祭り参加 ＊後に録音テープを服部旦氏がCDに複製
		秋	＊上杉武雄・大西信武両氏経営の端野鉾山飯場を藤山ハルさんに提供、移築。 ハルさん常呂町で3度目の家となる ・現北見市常呂町字常呂605番地15（現存） ・後、金谷栄二郎・フサさん宅→長男：野田一正氏 →一正氏遺族（野田トヨ子さん）（註：服部旦氏）
昭和40年	1965	12月16日	常呂町郷土資料館並びに東京大学文学部研究室落成開所式（東大学長：大河内一男氏、文学部長：中村元氏、服部四郎氏出席）（「広報ところ」） ＊常呂町文化連盟機関紙「新墾」第6号は、常呂町郷土資料館・東大文学部常呂

			研究室落成・開館特集を組み、服部四郎氏が「常呂町とのめぐりあい」という文を寄稿。文頭、「常呂町と私とのめぐりあいには、劇的な瞬間があった…昭和30年の夏以来、数えてみると長期短期を合わせて7回この町に滞在したことになるが、本当に感慨深い」と述べ、藤山ハルさんとのめぐりあいがきっかけとなって大西信武さんと出会い、東大の発掘へと続き、そして常呂町郷土資料館と東京大学文学部常呂研究室の建設につながったことを綴り、「…次々に連鎖的なできごとが起こり、常呂町が私にとって極めて親しい懐かしい町となったことを思えば、あのめぐりあいは、即ち、常呂町とのめぐりあいであったと言えると思う」と結んでいます。
昭和42年	1967	7月1日	北海文化研究資料陳列館（東京大学文学部常呂資料館併設）落成式に藤山さんら樺太アイヌのひとたちが来賓として出席（落成式文書） * 村崎恭子『カラフトアイヌ語文法編』の服部四郎氏序文から 「…本学（東大）文学部は、農学部や理学部と違って、東京以外の地に研究施設を持つことはなかったが…遠いオホーツク海岸に出店を持つこととなった…そのきっかけが、あのアイヌの老嫗（藤山ハルさんのこと）を偶然発見したことだったと思うごとに、感慨無量のものがある」
昭和43年	1968	12月	ハルさん、常呂町内の道営住宅に入居：常呂町4番目の住居で終の棲家となる (註：服部旦氏)
昭和46年	1971	3月	藤山ハルさん、金谷フサさんら7人で国立劇場第11回民俗芸能公演出演 藤山ハルさんのトンコリ演奏にあわせて、樺太アイヌの舞踊その他を公演 (「北海道東部に残る樺太アイヌ文化1」)
		11月	藤山ハルさん、常呂町文化功労賞受賞 * 戦後樺太から引き揚げ、常呂町開進町に居住。樺太アイヌ文化の伝承者で、特に樺太アイヌ語にかけては天才であり、その資料により『アイヌ語方言辞典』（服部四郎編）が出版…。本年3月、東京国立劇場において樺太アイヌ伝統芸能儀式の披露を行い…言語学・民俗学・文化人類学上もっとも貴重な存在で学術的にも価値が高く、本町にとって非常に名誉なこと…。 (常呂町教育委員会が推せん：「推せん調書」から抜粋)
昭和47年	1972	11月10日	大西信武『常呂遺跡の発見』（講談社）発刊 * この本の「藤山ハルさんのこと」という章で、「…ただ頭がいいばかりでなく、

			万事に冴えている。歌も踊りも話もうまいし、いっぱい生活の技を持っている。何だってその器用な手でさばく。モウル（肌着）などの作りはいうまでもなく、手甲やサバンテなどの刺しゅうも実に他の者がまねられないくらいの技術を持っている。そして、ウタラバケ（族長）かコタンコルクル（村長）の家系にあった人らしく、シントコや玉や杯などの古いアイヌの作った宝物を大事に持っているニシパ（物持ち）の一人でもある」と紹介している
昭和49年	1974	3月19日	藤山ハルさん没（73歳） * 常呂町国保病院で、娘二人（金谷フサ、白川八重子さん）と服部四郎氏が看取る（服部四郎手帳） * 生前、藤山ハルさんは土葬を強く希望し、服部四郎氏に依頼。服部四郎氏が上杉町長に陳情した結果、特例として町長から土葬の許可を得る。（金谷フサさんの遺族から服部旦氏聞き取り） * 21日、親族と服部四郎氏が立ち会って常呂霊園に埋葬（服部四郎手帳）
		5月14日	故藤山ハルさんに天皇陛下の木杯伝達：常呂町役場（「ところ埋蔵文化財センターどきどき」で保管） * 数少ないアイヌ文化の伝承者として民俗学会や言語学会から〈人間国宝的存在〉と大切にされた故藤山ハルさんに国から天皇陛下の木杯が贈られ…木杯は、網走教育局長からハルさんの長女、金谷フサさんに伝達されました（「広報ところ」）
昭和51年	1976	12月25日	村崎恭子／著『カラフト・アイヌ語』（国書刊行会）発行 * 藤山ハルさんの研究に基づく著作
昭和52年	1977	3月21日	NHK企画の第1回芸能の祭典に金谷栄二郎さん他7人が出演（NHKホール）、NHK総合テレビで放映。カラフトアイヌの災厄を知らせ、家の幸せを守る神であるカラスへの祈りの儀式的踊り、トンコリ・ムックリ・太鼓演奏 （常呂町文連機関紙「にいばり」第13号）
昭和53年	1978	5月	村崎恭子氏（東京外語大助教授）が第5回金田一京助博士賞受賞 * 樺太アイヌ語の完璧な話し手であった故藤山ハルさんの許へ通い、14年間という長い期間の調査研究成果で受賞 * …藤山ハルさんは、私をわが子のように可愛がってくださり、私がわかるまで何度も何度もやさしく教えてくれた （「広報ところ」）

		7月	金谷栄二郎・フサ夫妻、野田文恵ら6人でトンコリのレコード発売 （網走市の北方少数民族資料館ジャッカ・ドフニで4月に6曲録音。 収録曲：トー・キト・ランラン（白鳥が湖に来るようす）、トウス・ヘチリ（神様を呼び出すお祈り）他。＊CBSソニー「トンコリ 滅びの五弦琴」 ＊中村とうよう『雑音だらけのラブソング 70年代篇』の「アイヌ楽器の素朴な生命力」という文に、レコードの内容紹介、感想を書いている。
昭和54年	1979	4月	樺太アイヌ語の研究者：村崎恭子氏の「金田一賞を受けて 藤山ハルさんのこと」という文（北海道新聞掲載）を常呂町文化連盟機関紙「新墾」第14号に転載。 ＊この中で、「私の研究はすべてアイヌ語カラフトライチシカ方言のすばらしい話し手、藤山ハルさんの功績」とし、藤山ハルさんを発見し、紹介してくれた服部四郎氏への謝意、そして「今は亡きハルさんの力がどんなに大であったか、皆さんにわかっていただきたい」と藤山ハルさんの知識の豊富さ、正確さ、優しさを伝えています。 ＊藤山ハルさんの民族衣装姿の写真所収
		8月	村崎恭子／著『カラフト・アイヌ語…文法編』（国書刊行会）発行
		10月	金谷フサさんが妹：白川八重子さんとともにエイボン女性年度賞（アイヌ文化伝統芸術賞）受賞。樺太アイヌ民族楽器トンコリ演奏者として、東京の授賞式では夫の金谷栄二郎氏とトンコリ演奏（「トー・キト・ランラン」） ＊金谷栄二郎氏採譜の「トー・キト・ランラン」の楽譜を、後に服部旦氏がところ埋蔵文化財センター「どきどき」に寄贈、同施設で収蔵 ＊金谷フサさんは、藤山ハルさんの没後、樺太アイヌとしての自覚が強まり、衣装・舞踊・料理・楽器などの活動が認められて受賞（『北海道に残る樺太アイヌ文化1』の萩中美枝「常呂での調査と金谷フサさん」から）
昭和55年	1980	11月	金谷栄二郎・金谷フサ夫妻、常呂町教育文化貢献賞受賞 ＊民俗文化：樺太アイヌの伝統楽器トンコリの製作・演奏を通して文化の守り手として多年にわたり尽力（「広報ところ」）
昭和58年	1983	3/8-4/14	町民センター主催の樺太アイヌの楽器トンコリ製作教室（町民センター工作室） 開催：講師／金谷栄二郎氏（広報ところ）
		11月3日	服部四郎氏、文化勲章受章。 ＊（11月4日）陪食の席で、天皇陛下に藤山ハルさんを調査したカラフトアイヌ語

			のことを話題にした文から抜粋 「…文化勲章を戴いた折、受彰者や文化功労者の方々とで陪食の栄を賜りましたが、私は比較的近くの席を与えられましたので、カラフト西海岸北部から引き揚げたアイヌのお婆さん（註：藤山ハルさんのこと）の言葉を調査した時のことを申し上げ、北斗七星や天の河を知らないので驚いたことをお話…」 （服部四郎「陛下と琉球方言」『昭和の民のこころ…天皇陛下に捧げる各界奉祝の声』所収、服部四郎『一言語学者の随想』汲古書院にも同文所収 註：『アイヌ語方言辞典』で、藤山ハルさんは、北極星と北斗七星は〈知らない〉、天の河は〈見たことがない！〉と答えています。 註：服部旦氏の四郎氏からの聞き取り：星の名前を知らないことに関して * 夜、野外での活動が行われないからだろうと四郎氏は解している 註：服部旦氏の聞き取り：四郎氏が驚きを覚えたハルさんに関して言上した他の2つについて ・アイヌ語に色彩名が非常に少ないこと ・屈斜路湖畔池の湯での調査時に、ハルさんを観察して気づいたこととして〈ハルさんの植物に関する知識は有用植物のみだった〉こと * 服部四郎氏は、この有用植物に関して「ハッとし、ひとりアイヌの問題ではなく、人間の世界認識のあり方、即ち、人間はそれが自分にとって有用か有用でないのかを基準にして情報を取捨選択しているのだ」ということに気づいた、と旦氏に話していたとのこと
昭和59年	1984	6月-11月	金谷フサさんから樺太アイヌの風俗・文化の聞き取り調査 調査者：萩中美枝（「ところの社会教育」） 金谷フサさんを中心に、常呂町樺太アイヌ文化保存会を結成。樺太アイヌの古式舞踊、衣装制作、料理を中心に活動（金谷フサさんの葬儀使用略歴から）
昭和60年	1985	3月31日	昭和59年度文化財国庫補助事業調査報告書「カラフトアイヌ古式美舞踊」（日本民俗舞踊研究会）発行 * カウチョ・ムックリ演奏：金谷フサ、トンコリ演奏：金谷フサ、栄二郎 * 舞踊：常呂町樺太アイヌ古式舞踊保存会 黒岩俊生「トンコリ作りの記録」 小林公江「樺太アイヌの音楽」 村崎恭子「樺太アイヌの舞踊音楽」 須藤武子・増田良以「舞踊譜」

			増田良以「樺太アイヌ古式舞踊：舞踊の特徴」 金谷フサさんから樺太アイヌの風俗・文化の聞き取り調査 調査者：萩中美枝（「ところの社会教育」）
昭和61年	1986	1月-3月	樺太アイヌのトンコリ製作教室（スポーツセンター）金谷栄二郎氏による 製作・演奏指導（「ところの社会教育」）
		3月10日	金谷栄二郎・宇田川洋／著『樺太アイヌのトンコリ』（ところ文庫2） （常呂町郷土研究同好会）発行
		5月、11月	金谷フサさんから樺太アイヌの風俗・文化の聞き取り調査 調査者：萩中美枝（「ところの社会教育」）
		7月-8月	樺太アイヌの板舟製作・伝承事業（指導：平村武雄・金谷栄二郎）：旧常呂中 かしわ寮 ＊完成後、ライトコロ川で古式にのっとり進水式 （「ところの社会教育」） ＊金谷栄二郎氏がトンコリ製作、板舟製作に使用した大工道具は、ところ埋蔵文化 財センター「どきどき」收藏
		12月16日	金谷フサさん逝去（66歳 葬儀会場：常呂町内北進町会館 菩提寺：立正寺）
昭和63年	1988	3月	樺太アイヌトンコリ製作教室（旧常呂中かしわ寮）指導：金谷栄二郎 （「ところの社会教育」）
		6月-7月	樺太アイヌ文化聞き取り調査（最終年度）故金谷フサさんから聞き取った 樺太アイヌの風俗・習慣：言語等の資料整理。調査者：萩中美枝 （「ところの社会教育」）
平成元年	1989	2月-3月	樺太アイヌトンコリ製作教室（旧常呂中かしわ寮）指導：金谷栄二郎氏 （「ところの社会教育」）
		3月31日	金谷栄二郎・宇田川洋／著『樺太アイヌの板舟』（ところ文庫5） （常呂町郷土研究同好会）発行
平成4年	1992	11月20日	『聞き書 アイヌの食事』（農山漁村文化協会）出版 同書内に、萩中美枝「樺太地方・金谷フサさんの暮らしと食べもの」所収 （樺太西海岸の暮らしとまつり、いろいろな保存食の用意、樺太西海岸の 料理：写真付き作り方紹介）
平成5年	1993	8月1日	司馬遼太郎『街道をゆく38 オホーツク街道』発刊 （「アイヌ語という川」の章で、服部四郎と藤山ハル、大西信武との出会いに

			触れている)
平成 7 年	1995	1月29日	服部四郎氏、藤沢市の長寿園病院において 86 歳の生涯を閉じる * 文化勲章受章者、日本学士院会員、東京言語研究所運営委員長、 東京大学名誉教授 (『服部四郎追悼文集』から)
平成 8 年	1996		萩中美枝・宇田川洋／編『北海道東部に残る樺太アイヌ文化 1』(常呂町樺太 アイヌ文化保存会)発行、 * 主な内容：藤山ハル、金谷フサさんのプロフィール 萩中美枝：NHKアイヌ伝統音楽との出会い・常呂町との出会い・ 常呂町での調査と金谷フサさん 千葉伸彦：藤山ハルのトンコリ演奏法について
平成 9 年	1997	2/5-3/12	樺太アイヌトンコリ製作教室(遺跡事務所)樺太アイヌ文化保存会が協力
平成 11 年	1999	1月21日	NHKスペシャル「街道をゆく オホーツク街道」放映 * 藤山ハルさんの次女：白川八重子さん、金谷フサさんの夫：金谷栄二郎さんへの インタビュー(家族に樺太アイヌ語を教えなかったこと) * 藤山ハルさんが生前残した録音テープの一部(樺太の思い出)を聞くことが できる：ハルさん肉声の樺太アイヌ語に日本語訳の字幕付き
平成 13 年	2001	9月1日	ところ遺跡の森講演会：講師／服部旦氏(大妻女子大学文学部日本文学科教授) 「常呂町民、藤山ハルさんと大西信武氏の功績」(会場：常呂町中央公民館)
		9月26日	金谷栄二郎氏逝去(77歳) * 金谷栄二郎氏は、妻のフサさん、義母の藤山ハルさんの樺太アイヌ文化を尊重し 伝承に尽力した。
平成 20 年	2008	11月2日	ところ遺跡の森講演会：講師／服部旦氏(大妻女子大学名誉教授) 「藤山ハルさんと服部四郎氏との出会いーところ遺跡発見の道ー」 (会場：常呂町多目的研修センター) 藤山ハル記念碑建立・除幕：常呂霊園 * 碑文：樺太アイヌ語話者 藤山ハル此処に眠る * 記念碑の上部には矢印があり、藤山ハルさんが終生帰ることを願っていた故郷、 樺太西海岸エストリを指し、その方角の面に「樺太 エストリ」の文字を刻印 (北海道新聞朝刊：地方版)
		11月28日	昭和 49 年、国から藤山ハルさんに贈られた天皇陛下の木杯を、次女白川八重子

			さんが北見市に寄贈：「のぞみの園」で寄贈式（常呂埋蔵文化財センター蔵） （北海道新聞朝刊：地方版）
平成21年	2009	3月	服部四郎先生生誕100年記念シンポジウム「北東アジアの日本語」報告書 （島根県立大学）発行 * 服部旦氏が平成13年9月に行った「常呂町民藤山ハルさんと大西信武氏の功績 …服部四郎アイヌ語調査日記より」の講演録を収録
平成26年	2014	8月6月	藤山ハルさんの次女：白川八重子さん死去

■写真で見る藤山ハルさん



* 自宅でくつろぐ藤山ハルさん



* ハルさん自作のトンコリ （共に昭和40年代中頃）

* 写真データ提供
服部旦氏
（左2枚と次ページ）



昭和46年11月 常呂町文化功労賞受賞：賞状と胸にリボン、右にトンコリ



昭和38年9月19日 ところ伊ソヤンケまつりから



上：木杯の伝達式

(左：網走教育局長、中央：金谷フサさん
右：上杉町長)

右：昭和46年6月に国から贈られた天皇陛下の木杯
(写真データは服部旦氏提供)





* 中央：藤山ハルさん 2 番目の家、右手は 3 番目の家
左端にわずかに覗いている家（小松やよえさん宅）の場所に、ハルさん 1 番目の家があった
写真データ提供：服部旦氏



■トンコリを弾く金谷フサさんの写真説明

服部旦氏が金谷フサさんの遺族から聞き取りしたもの
(平成26年7月27日)

昭和55年頃。旧栄町（現北進町）の藤山ハルさん3度の
目宅で撮影。

右横に座っているのは夫の金谷栄二郎氏。

フサさんの持っているトンコリは栄二郎氏作で、藤山ハルさ
んが使ったものと比べ大きい。

ハルさんによれば、「昔、海で死んだ子どもを偲んで、母親
が抱くようにしてトンコリを弾いていた」とのことなので、そ
んなに長大なものではないと思う。

■背景の樺太アイヌ衣装の説明

向かって右は男物のアツシ（男物は北海道アイヌのそれと似
ている）。左側は男物の羽織。どちらも金谷フサさんの作品。

* 平成20年11月、常呂霊園内の藤山ハルさん記念碑除幕
式で、この羽織を服部旦が着用。（北海道新聞掲載）

* 男物の羽織は、現在ところ埋蔵文化財センター蔵。

※藤山ハルさんは、刺繍がとても上手な人で、昭和42～43
年頃、宮内庁から昭和天皇陛下のブックカバーを作ってくだ
さいと頼まれたが、恐れ多くてできない（手が震えてできな
い）、また宮内庁は麻布を持ってきたが、ハルさんは麻布で
は刺繍はできないと断ったとのこと。



■左・下の写真

金谷栄二郎・フサさん夫妻が、常呂町教育文化貢献賞を受賞した昭和55年の常呂町文化祭で、トンコリやムックリを演奏したときのもの。

金谷栄二郎さんが演奏しているトンコリは、金谷さん自作のもの。前のページ同様、藤山ハルさんのトンコリに比べるとかなり大きい。





■左・下の写真

金谷フサさんを中心に、昭和59年に結成した「常呂町カラフトアイヌ文化保存会」の会員が、昭和60年11月3日、常呂町文化祭で古式舞踊とトンコリ演奏を披露したときのもの。





■上 2 枚の写真

昭和61年7月15日から10日間ほどかけて復元製作した樺太アイヌの板舟。場所は、スポーツセンターの前の道路を挟んだところにあった旧かしわ寮（現在は教員住宅）。製作者は、金谷フサさんの親戚にあたる平村武雄ヘンケ（釧路市）と金谷栄二郎さん。



■ 左・下の写真

板舟の完成を祝い、7月25日、ライトコロ川河口で行った舟おろしの儀式。

参加者は、常呂町カラフトアイヌ文化保存会の会員。

※この板舟の製作については、金谷栄二郎・宇田川洋／著「樺太アイヌの板舟」（ところ文庫5）に製作過程や由来などが詳しく載っています。

